

探訪 北の風景 49

寒地研のチシマザクラ 札幌市豊平区

青木和弘

国立研究開発法人土木研究所の寒地土木研究所（札幌市豊平区）の構内を流れる精進川の両側に約180本のチシマザクラ咲き誇る。1984（昭和59）年に釧路管内の浜中町霧多布（きりたふ）から取りよせた苗木を植樹したものだ。

チシマザクラは、エトロフザクラやクナシリザクラとも呼ばれる。道内全域で見られるエゾヤマザクラが高さ7〜10メートルになるのに、チシマザクラは3〜5メートルほどの低木で、幹が短く根元から枝分かれして横に広がるのが特徴だ。ちなみにソメイヨシノは10〜15メートルにもなる。

チシマザクラは、花びらが足元から上や横に広

がる感じで、色は、咲き始めはピンクだが、満開には白に変化するなど、色彩を楽しめるめずらしい桜でもある。また、株によって花の色はさまざまという。

千島列島やサハリンに分布し、道内では、道東や道北で多く見かける。道外では本州中部以北の山地に生育し、寒さに強い品種として知られ、モンゴルに植樹したチシマザクラも花をつけているという。

記録に残るチシマザクラの歴史は、今から二百年前の江戸時代にさかのぼる。北海道は「蝦夷地」と呼ばれ、千島列島を含む東蝦夷は、豊富な海産資源に恵まれながら、夏は霧、冬は荒波で航海が難しく、松前や江差などの西蝦夷よりも開発が遅れていた。そこに高田屋嘉兵衛が登場し、幕府と一体になって漁場を開き、困難とされた択捉航路も開拓して巨万の富をもたらし、箱館（後の函館）発展の基礎を築いた。

しかし1800年代初頭から、ロシア船の蝦夷地襲来が相次ぎ、江戸幕府は1807年、「ロシア船打払い令」を出し、仙台・会津両藩に東西蝦夷地の守備を命じている。1808年に幕吏に随行して蝦夷地入りした文筆家の児島紀成は、択捉島で3カ月を過ごし、島の様子を『蝦夷日記』（1808年）に細かく書き残している。その中に、島で見た桜を歌に詠んでいる。



足元から咲く真っ白く色を変えたチシマザクラの花

色も香もおなしさくらの花なれと時しかはれば
みつゝまとひぬ
道にしてすくせし春をいまさらにおもひ出よと

花のさくらむ
いとせめてさけるさくらの一枝にこもりて見ゆる春の色かな

根室市の桜の名所として知られる清隆寺のチシマザクラは、1869（明治2）年に根室の大工・田中文七氏が国後島から持ち帰った株を自宅の庭で育て、後に、檀家であった清隆寺に寄贈したものとされ、それから園芸品種として根室・釧路管内に広がったという。

「チシマザクラ」という名前は、1886（明治19）年に植物学者の宮部金吾博士が命名している。宮部博士は札幌農学校や東京大学などで活躍





寒地土木研究所の構内を流れる精進川の両側に咲き誇る約180本のチシマザクラは、ピンクの中に白い花も混じる



木は根元から枝分かれし、低い位置から花を付けるので、目の高さ美しい花を見ることができる

し、北大植物園の初代園長も務めた。

「千島桜の咲く山」（1973年）という本がある。山を愛し、北アルプスの奥穂高で、1973年1月2日、雪崩で逝った、29歳の調子悠美子さんの遺稿集だ。当時、女性登山家として頭角を現し、岩登りが得意でヒマラヤ遠征計画にも声を掛けられるほどで、山岳雑誌などにエッセイも寄稿していた。同書の中に、教師として1969年、根室管内中標津町の開陽小中学校に赴任したばかりの彼女が、武佐岳（同町、1005・7メートル）の山開き登山で、下山途中に出合ったチシマザクラに、心を洗われるほど感動する様子を綴った一文がある。

寒地の厳しい風土に堪え忍び、美しい花を付けるこの桜には、望郷の念への慰めと、人生への勇気を授ける力がある。